

鶺鴒沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 1 0 号

地名おちぼ拾い……………小林 政夫・佐藤 和子…	1
大杉 栄の『自叙伝』……………岡田 哲明…	8
Coffee Break……………	20
「遥かな友に」誕生の地 道志川を訪ねる……………守谷 俊博…	22
子どもの頃の遊び……………	25
鶺鴒沼地区公民館まつり展示報告 イラストでみる「子どもの頃の遊び」	
子どもの頃の記憶……………森岡 澄…	46
戦後70年 終戦時を顧みて……………綿谷 克延…	48
今井達夫遺稿 ⑮	
『へびとの長いおつきあい』……………今井 達夫…	50
活動の記録（平成26年10月～平成27年3月）……………総務担当…	53
編集後記 ……………	56

『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841）に、「鶺鴒沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鶺鴒沼を語る会 発行

地名おちぼ拾い

小林 政夫・佐藤 和子(会員)

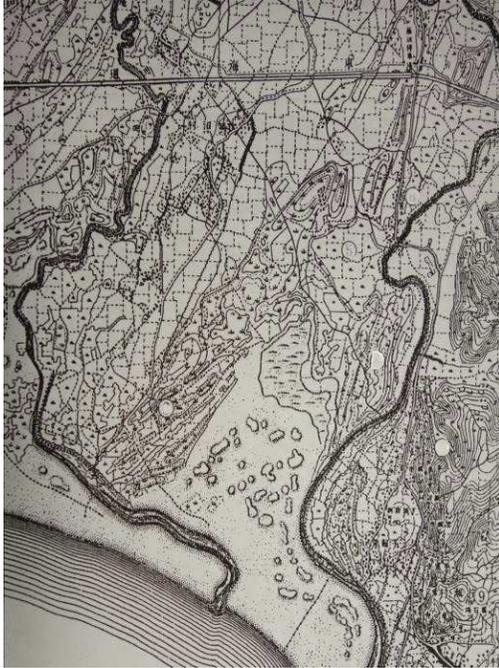
はじめに

今から約 30 年程前(昭和 62 年)日本地名研究所の協力により、藤沢市から「藤沢の地名」という本が発行されました。藤沢を南は鶴沼、辻堂から北は遠藤、御所見の 10 地域に区分し、各地域ごとにそれぞれの協力員によって、これまで何気なく呼びならわしてきた地名を掘り起こし、まとめたものです。鶴沼については「鶴沼を語る会」が協力しました。

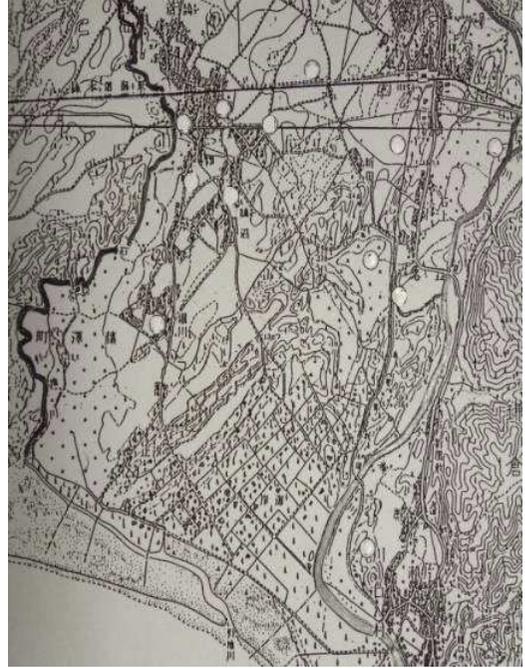
様々な地名の由来を探すことは、先人たちの生活、風俗、習慣、文化、さらにはその地域の地形や植生などの自然環境まで知ることとなります。「鶴沼」という地名は平安時代の史料に郷名として見られ、「くぐひ=鶴」(白鳥の古名)が飛来してくる沼があり くぐひぬま→くげぬま となったとされていますが果たしてどうなのか、定かではありません。ただ鶴沼一帯は砂地であり、砂丘との間には池が点在していたようですし、人々が白鳥に関心があった事などがその地名の元となったのでは……と思われています(県内に沼は沢山あったが、なぜ鶴沼にだけ飛来したのか)。当会元会長の伊藤節堂さんは、鶴沼の「クグヒ」と題した一文に、鶴沼に渡来した白鳥はオオハクチョウであったろう、と記しています(会誌『鶴沼』第 12 号)。

鶴沼の北西部一帯は、皇大神宮を中心として集落ができ、半農半漁の村でした。それらに関する通称地名も多く、地名を通じてかつての鶴沼の様子を垣間見ることができます。江戸時代は幕府の鉄砲場でもあった南部一帯は、明治時代に入ると、温暖な気候、美しい風景に恵まれていることもあって別荘地としての開発が進んできました。砂地に松苗を植えて人々が住み始めると、だんだんと場所を指す地名が生まれてくるようになり、特色ある地名も残っています。

今回はこれらのことを地域の方々から話を聞き、実際に歩いて確かめ、明治、大正期の古い町村図や地形図などとも照らし合わせてまとめてみました。「藤沢の地名」ではどうしても確かめられなかったり、又それ以降に挙がってきた地名なども改めて今回聞き取り調べてみました。かつて「本村」と呼ばれていた北西部一帯の地域や、東側「江の島道」沿いの石上の方々からも話をうかがう事が出来たので、その一部ですが以下のようにまとめました。地名に関する調査はこれからも続けて行きますのでご協力いただきたいと思います。(さとう かずこ)



明治15年の鶴沼 南部砂丘地帯



大正10年の鶴沼 南部は宅地

地図に刻まれた歴史と景観 藤沢市 より

古くから伝わる地名は、自然の情景などから付けられたものが多く、その名には、飾り気がなく聞かせる者にとっても当時の情景を思い起こさせる親しみがある。

— 日本地名研究所 所長 谷川彰英氏の言葉 —

○ 地名調査グループの活動の記録

グループ発足のきっかけ

「鶴沼を語る会」例会終了後の昼食の際、同じテーブルを囲んだ者から、「藤沢の地名」で取り上げられなかった地名が話題になり、地区の古老などからの聞き取りや個々の調査を通じて再度調べてみる必要があるのではないかとの意見があり、賛同した者で小グループを立ち上げ調査を始める事となった。

今を逃せば消えてしまう通称地名や私地名を集め、出来れば地名の生い立ちまで追究してみたい。地区の識者から聞き取りを行ったり、文献等で調べたりしてまとめあげたい。特に、東海道線以北の鶴沼地区に残された通称地名の収集や解明には力を入れてみたい。

すでに失われてしまった通称地名や私地名等の聞き取りと記録・調査は藤沢の

地名のグループによって「藤沢の地名」として冊子が刊行された。しかし、その際の調査からこぼれたものもみられるので今回、鵜沼地域の古老、識者から更に聞き取って記録した。

<聞き取りに協力いただいた方、情報をいただいた方>

榛葉 昭市 宮崎 文雄 川島 弘之(普門寺) 宮澤 彰
内藤 喜嗣 高橋 博明 各氏

<グループメンバー> (アイウエオ順)

有田裕一・小林政夫・佐藤和子・柴田薫子・関根次郎・渡部かほり 6名

○ 聞き取りでわかった新たな通称地名・私地名

- ・古^{ふる}川^{かわ} → ① 引地川の旧河川路のなごりで見られ、堀川田の中ごろより、鵜沼海岸3丁目、2丁目の南側を通過して海へ。
② 引地川の蛇行部をカットした際、その蛇行部を古川と言っていた。カットした直線上の川を新川と呼んでいた。現「銀装」のあたり。
- ・ドンドン^{ぼし}橋 → 古川に架かっていた橋。位置不明。
- ・榎^{えのき}戸^と → 石上2丁目3付近。以前の加藤友吉商店北隣に大きな榎が一本あったので、この附近を榎戸と呼んでいた。鎌倉幕府が開かれた折、ここは高札場が置かれ、又、刑場(百叩きなど軽い刑)と定められていた、という。
- ・谷^や戸^と下^{した} → 秩父宮体育館の西側付近。地形からの地名。西側石上通りとの間に谷戸の地名が残る。コジキシラス^スの宮澤家の南東の一部を含む周辺。
- ・岡^{おか}田^だ → 鵜沼小学校北側の畑。この土地の所有者からの聞き取りあり。又、松が岡5丁目10～11番地あたりをそう呼んだという古い

土地の方もいる。地名の範囲はもっと広がりを持つか？（松が岡3・4丁目付近まで）

・コジキシラズ → 江の島道を通る人や、道付近の家々に恵みを求めた乞食も、この家が道から離れた奥にあるので、この家があるのは知らなかった。古くからの石上9軒のうちの1軒で、広さは現在の石上22-4・8・9・11と広い土地を所有し、所有地の殆どが竹藪で、門は現市立高砂公園と道路を隔てた所にあり「谷戸の門」と呼ばれていた。現宮澤博家の位置。

・^{さん}三 ^{かく}角 ^{はたけ}畑 → 橋1丁目2-72・73付近の三角地形の場所。

・^{たか}高 ^だ田 → 湘南学園グランド付近にあった地名。盆地状の土地で、昭和24~25年頃は、よく水溜まりになった（内藤会員談）。

「藤沢の地名」では、中岡・上岡を一緒にした地名とある。

・イナリ ^{やま}山 → 石上3-2-3から2-14付近。死者を吊った（火葬をした砂山とも伝えられている）。

・^{ろくざえもんがし}六左衛門河岸 → 境川の改修工事が行われた明治10年頃まで石上の渡船場（石上3丁目4~5付近）からやや下った所に、豪農六左衛門（昭和の初め頃の斉藤保氏の祖）の専用船着き場があり、農業のかたわら肥料・木材を仕入れていたという。境川は満潮を利用して荷足船（にたりぶね）の出入りがあった。他に鵜沼では紋十郎河岸（鵜沼松が岡1丁目14）や河岸（現・秩父宮体育館近く）があった。

・^{てっぽうば}鉄砲場の ^{はたけ}畑 → 藤が谷3-3 企業庁宿舍付近。

・^{ろっ}六 ^{ぼん}本 ^{まつ}松 → 横須賀・花立・長塚の一带の中程で、この辺りは頼朝が鎌倉攻めの際（伊豆にて旗挙げ）、大庭景親、北条らによって大敗（石橋山の戦）、北条氏を味方とし、再挙、鎌倉攻めの際、平家方と一進一退の戦いをした所。六本松の古戦場として名が

残る。この辺りは戦役での死者の塚も多く、七塚→長塚（ちようづか）の名が残る。万福寺通りの首塚もその一つ。

まなづるばし
・真奈津留橋 → 鵜沼小学校西北端の道路に架かっていた橋。加藤徳右衛門はその著の中で「鵜沼小学校校庭の地下水路にて」の文あり泉からの水の湧き出しは、江戸時代末の文久年間（1861～63）には殆どなくなったように記載している。

真奈津留橋の位置が明確になった。旧藤森稲荷西側の現在駐車場になっている場所が水田であったのでそこが水源で、關根家の西側を流れ、普門寺前から斉藤家の東側を流れ、下の沢で引地川に注いでいた。（現在はすべて暗渠）

※ 川の流路・橋の位置については異論あり。

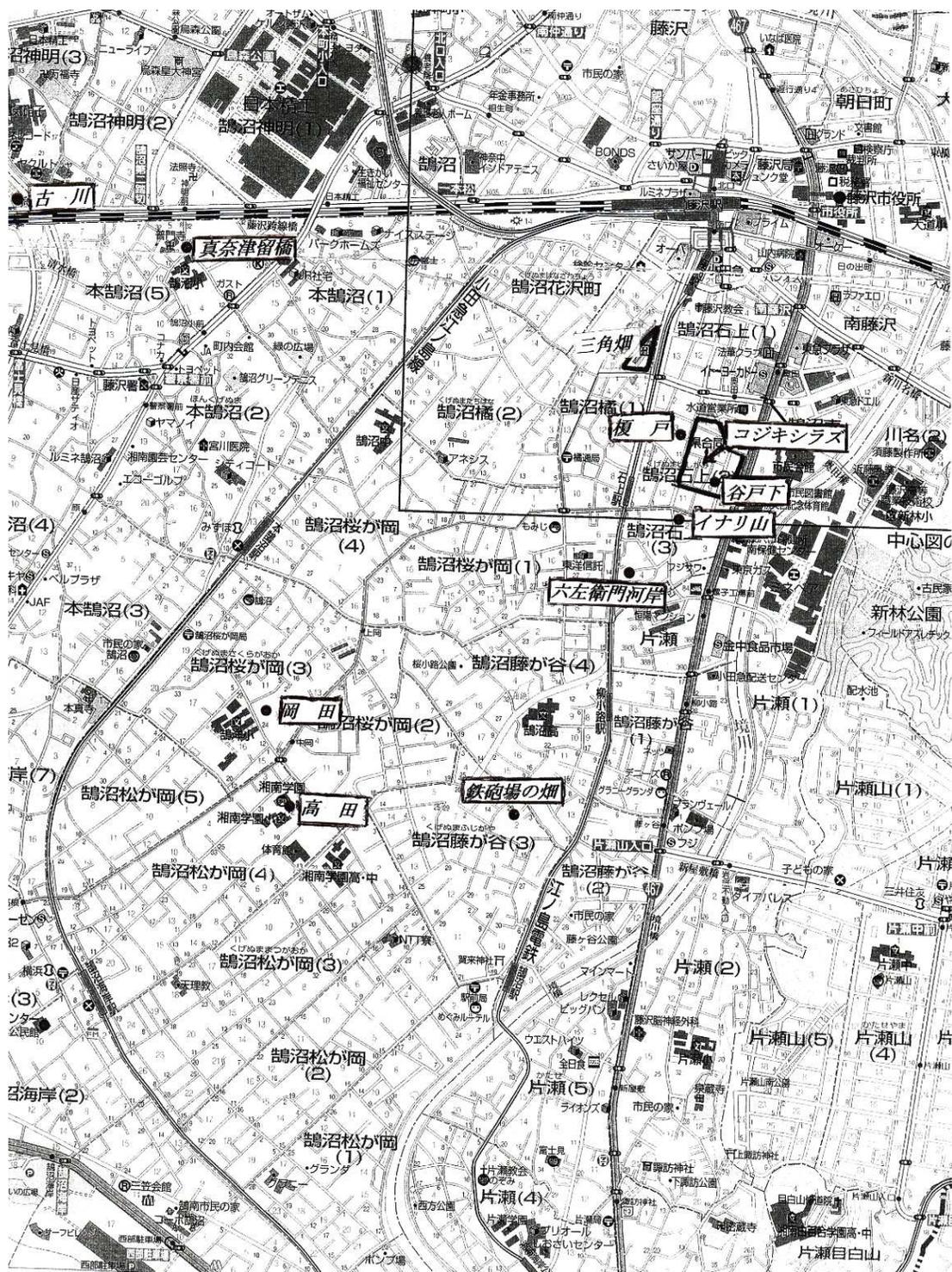
参考：前記、真奈津留橋については、加藤徳右衛門著「藤沢郷土誌」に次のような記載がある。

鵜沼字中井に保食神（うけもちのかみ）を祀る稲荷社（現在は宿庭なる關根守太氏の邸内）は藤の森とも称し、老松鬱蒼として藤の密生したる為め其名ありしと、弘元三年新田義貞公兵を率いて鎌倉に北条高時を討つに當り本村通過の際馬をこの森に駐めたり、社の隅の方に一つの湧水ありて水清かりしかば公は自らこの泉を飲みて楽しみたりと里人はその武名を慕ふて本社を建立せりと伝ふ。泉は渾々と湧出し流れて川をなし、これに架するの橋を**真奈津留橋**と称したりと。其橋の所在は現在の鵜沼小学校校庭の地下水路にて道路に當る場所に架せられたるもの、当時この森の附近には多くの鵜の鳥住みて遊びもし巢喰ひもし、其野趣賞すべきの地点たりしと、鵜沼の地名も或は茲に起因したるものにや其老木も文久年間迄にことごとく枯死し泉もまた僅かな流れとなりて現在に至る。明治の中世鐵道線路の布設に當り朽痕の松の根方より青銅錢の夥しく掘り出されたることありき。

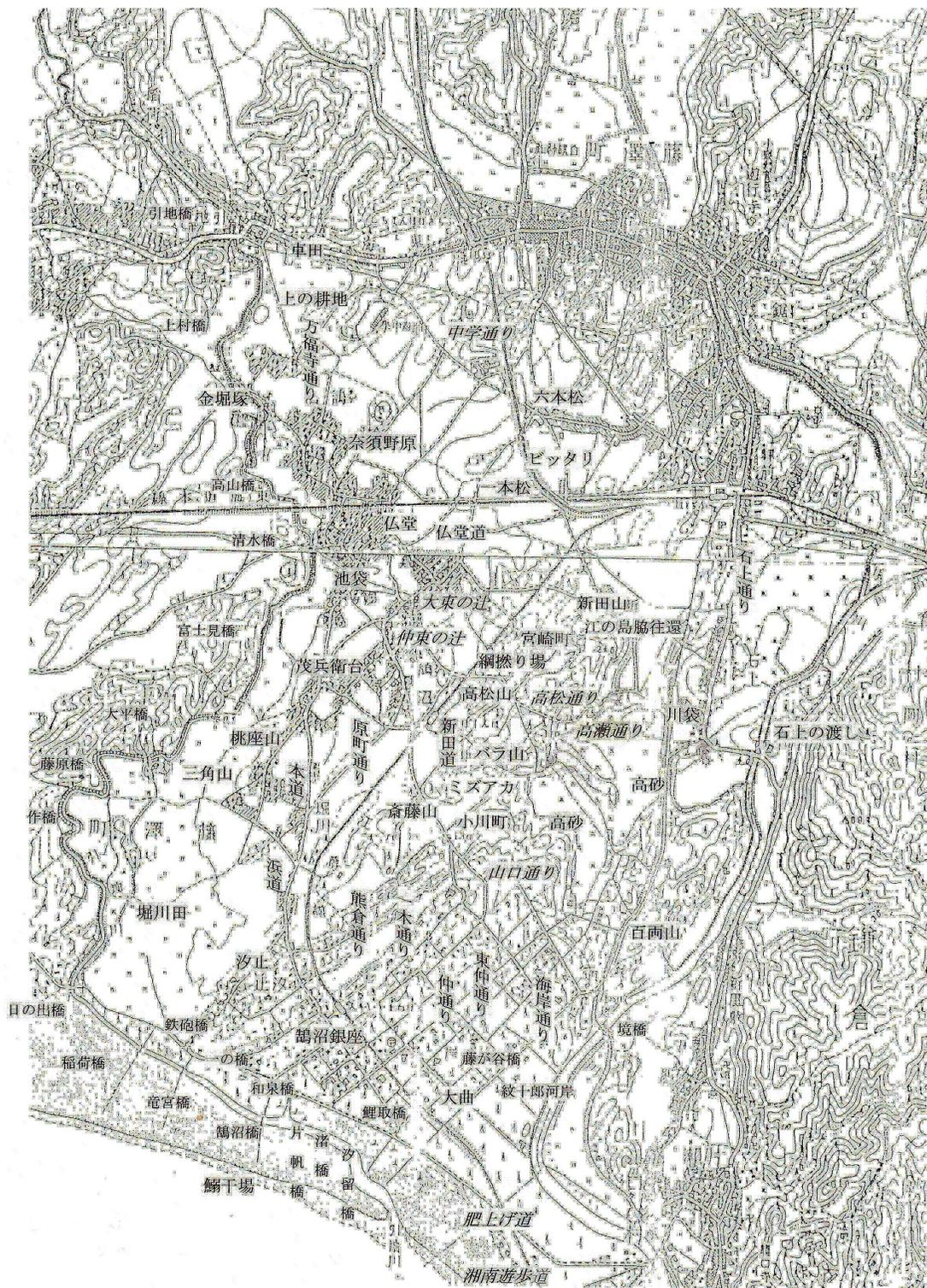
平成 26 年度の調査結果は、以上の通り。

（こばやし まさお）

聞き取りできた鵜沼の通称地名・私地名



鵜沼の通称地名・通り名

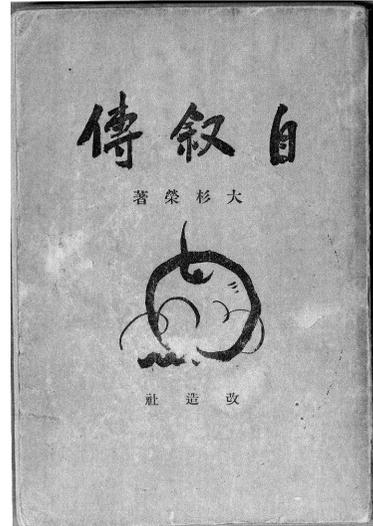


大杉 栄の『自叙伝』

岡田 哲明（会員）

鵜沼海岸駅前にあった古本店耕書堂で私が数年前に入手した『自叙伝』大杉栄著について書いてみたい。私の興味を引いたのは、口絵写真に鵜沼東屋で撮った大杉一家のスナップ写真が3葉載っていたからである。

『自叙伝』は大正 10(1921)年9月から翌11(1922)年3月にかけて大杉栄が伊藤野枝、長女魔子とともに鵜沼の東屋に滞在〔藤沢文学年表〕して執筆し雑誌「改造」に連載したものが、彼の死の約2か月後に単行本としてまとめられ改造社から出版されたのがこの本である。



大杉栄プロフィール

大杉栄は明治 18(1885)年1月17日香川県丸亀で生まれた。父は大杉東、当時陸軍少尉。栄の生後間もなく東京転任、麹町番町に居住。なお本籍は愛知県。4男5女の長男。栄以下、春、菊、伸、松枝、勇、進、秋、アヤメである。



鵜沼海岸における大杉。「自叙伝」を書きに来ていたのを同宿した久米正雄が撮影（1921）

22(1889)年父の転任で新潟県新発田へ移る。24(1891)年新発田本村尋常小学校入学、成績優秀、餓鬼大将。28(1895)年尋常高等小学校進学、30(1897)年新発田中学校入学。31(1898)年陸軍幼年学校受験不合格。32(1899)年

名古屋の陸軍幼年学校入学。34(1901)年、学内で男色事件（相手は画家中村彝の兄といわれている）を起こし禁足処分、秋には学友と格闘重傷を負い同校を退校処分となる。35(1902)年上京し東京学院に入学、順天中学5年編入。本郷会堂で洗礼を受ける。36(1903)年外国語学校仏語科入学。38(1905)年同校卒業、年上の女と同棲。39(1906)年電車賃値上げ反対運動で東京監獄に収容、堀保子と結婚、エスペラント学校始める。40(1907)年、平民新聞創刊。以後毎年のように社会運動で入獄、出獄を繰り返す。

大正4(1915)年12月、神近市子と恋愛、翌5(1916)年4月伊藤野枝と同棲。11月、日蔭茶屋事件。大正12(1923)年9月甘粕事件で生命を絶たれた。

著書著作、翻訳書は多数あるが、思想関係を除くと、フェアブル『昆虫記』『科学の不思議』『自然科学の話』、ダーウイン『種の起源』などがある。生来の吃音がなおらず、しかし語学は堪能で、英、仏、独、伊、露、スペイン語、エスペラント語に通じ「10ヵ国語でどもってやる」と豪語したという。

甘粕事件

大正12(1923)年、関東大震災後の9月16日に、アナーキスト（無政府主義者）大杉栄が伊藤野枝、橘宗一とともに甘粕正彦憲兵大尉ほかによって麹町憲兵分隊に拉致され、虐殺された事件は史実としてご存じの方も多いと思う。

この事件を、吉村昭はその著『関東大震災』のなかに「大杉栄事件」「大杉事件と軍法会議」の2章を設けて詳述している。概略を同書から書き抜いてみよう。

大地震の直後から朝鮮人來襲説や社会主義者の決起などの噂が立ち、警察は社会運動に従事していた者を次々と検束した。名目は、一般民衆から社会主義者として暴行を受けるのを防ぐ保護措置だが、事実は強制逮捕であった。大杉は野枝とともに鶴見に住んでいた野枝の前夫である辻潤の安否を尋ねたが不在のため、横浜の親戚に行き甥の宗一を伴って東京に戻ったところを甘粕に捕えられた。

警視庁も大杉を監視していたが、大杉が憲兵司令部に連行されたまま消息を絶ったことをいぶかしんで、内務省に報告、内務大臣から陸軍大臣に問い合わせ、初めて事件の全容を知った。警視庁は陸軍省の指示に従って大杉栄殺害の事実の漏えいを防ぐことに努力したが、やがて時事新報社、読売新聞社の記者に探知され、両社は9月20日、号外を印刷した。が、それを知った警視庁は号外を差し押さえた。

一方、警視庁から上記の報告を受けた陸軍省は報道機関に察知されたことに狼

狙した。これ以上事実を隠すことは不可能と判断し、甘粕大尉とその部下を軍法会議にかけることにした。と同時に、一般民衆の反応を恐れて新聞報道を厳しく抑圧する必要から内務省警保局に依頼して「この軍法会議の記事差し止め、社会主義者の行方不明その他これに類する一切の記事差し止め」という通牒を発令させた。

しかし、「大杉殺さる」という風説は日増しに広がり陸軍省は9月24日、軍法会議検察官名で次のような発表を行なった。

「陸軍憲兵大尉甘粕正彦に、左の犯罪あることを聞知し、捜査予審を終り、本日公訴を提起したり。甘粕憲兵大尉は、本月十六日夜大杉栄ほか二名の者を同行し、是を死に致したり。右犯行の動機は、甘粕大尉が平素より社会主義者の行動を国家に有害なりと思惟しありたる折柄、今回の大震災に際し、無政府主義者の巨頭なる大杉栄等の震災後未だ整はざるに乘じ、如何なる不逞行為に出づるやも計り難きを憂い、自ら国家の蠱毒（とどく）を芟除（せんじょ）せむとしたるに存るが如し」

この発表は、翌日の新聞に大々的に報道されたが、やがて文中にある「ほか二名」とは伊藤野枝と甥橘宗一（大杉の末妹アヤメの子6歳）であったこと、遺体は菰包みにして構内の古井戸に投げ捨てられていたことが明らかになると大衆はその残忍さに戦慄した。

それには報道機関も一斉に激しい批判を浴びせ、時事新報は「陸軍の大汚辱」と、東京日日は「軍人の敵、人道の賊」と厳しく非難した。軍法会議の結果、甘粕は懲役15年を求刑され12月8日に懲役10年の判決をうけて千葉の刑務所で服役した。極刑を予想した一般の人々はあまりの刑の軽さに呆然とした。

軍事裁判記録では、拉致後、直ちに腕で首を絞めて殺したと供述している。しかし、巷間では虐待の上の死と噂されていた。

昭和51年に大杉達の「死因鑑定書」が発見された。陸軍東京第一衛戍病院田中隆一軍医大尉が解剖した鑑定書の控を夫人が保管していたもので、田中の所見では、大杉栄と伊藤野枝の死因は縊死だが、左右の肋骨が複数本完全骨折し舌を出し眼球が飛び出していたという。激しい拷問というより鬻り殺しであった。

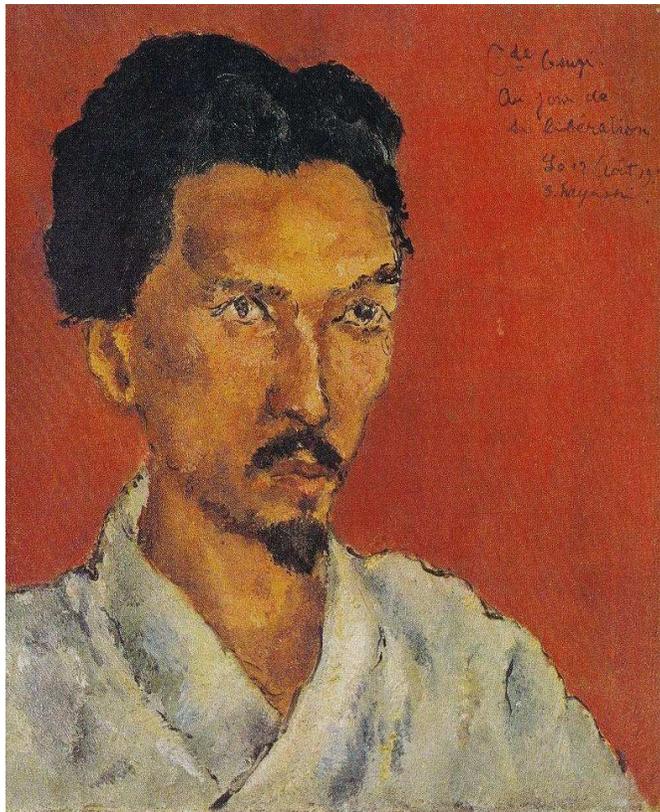
甘粕は、3年後に仮釈放されて、結婚しフランスに渡った。昭和4(1929)年2月帰国するも7月には満州へ行き、関東軍を背景に権勢をふるい右翼の中心人物となった。昭和14年、満洲映画協会の理事長に就任。昭和20(1945)年8月20日、理事長室の黒板に「大ばくち 身ぐるみ脱いで (元も子もなく という説もある)

すってんてん」と書き、青酸カリを呷って自殺した。

『自叙伝』の装幀、忘れるなよ

大杉は大正 11(1922)年末、日本を離れ上海に渡り、中国人になりすまして翌 12(1923)年 1 月上海からマルセイユにむけフランス船アンドレ・ルボン号で渡航している。目的は 4 月 1 日にベルリンで開催される国際無政府主義大会に出席するためであった。2 月 13 日マルセイユ着。まずリヨンの同志たちのアジトに滞在し、のちにパリへ出て、2 年前からフランスに絵画修業に来ていた画家で 10 年来のアナーキスト仲間でもあった林倭衛（はやししずえ）に手紙を出す。

林倭衛は大正 8 (1919)年 9 月の第 6 回二科展に大杉をモデルに「出獄の日の O 氏」を描いて出品した。大杉はこの年 6 月に尾行巡査撲打事件を起し、保釈金 20 円を積んで 8 月 12 日東京監獄を出所した。林はさっそく見舞いに出かけ、半日ほどでこの絵を描き上げたという。しかし、この絵は事前検閲に来た保安部長により展示撤回を命じられた。それを聞いた大杉は烈火の如く怒り、そんな馬鹿なことがあるものかと警視庁へ出向いてそ



出獄の日の O 氏 1919 46×38

の理由が治安法違反と知ると、「絵を撤回しろというなら、そのかわりに俺がその場所に立っていてやる。それなら文句あるまい」と反発「×日に展覧会場へ行く」と予告したところ、刑事 20 人、巡査 40 人が張込み、それに大勢の新聞・雑誌記者や写真班が加わり大騒ぎになった。

林は大正 10(1921)年、碓伊之助、坂本繁二郎、小出檜重らとクライスト丸で渡

仏するが、そのビザを申請すると大杉の肖像を描くような危険人物は許可しないと外務省筋からいわれ、「出獄の日の0氏」を絶対人目に止まる場所に出さないと誓約してやっと許可が取れたという。

南仏エスタックで絵画の制作にいそしんでいた林は、大杉からの手紙を受け取ると、すぐさまパリに出て二人は再会を喜んだ。ベルリンの大会は延び延びになっていて、ドイツ入国のビザもおろず4月も終り、メーデーの日、大杉はパリ郊外サン・ドニで開かれた労働者集会で30分の演説をしてフランス官憲に逮捕され、ラ・サンテの牢獄に3週間禁固された。出獄後は直ちにフランス追放処分となり6月3日箱根丸でマルセイユから日本に強制送還されてしまう。その船中から林倭衛にあてた手紙がある。

1923年6月7日付

「いろいろありがとう。今度の旅行では、きみのためにすっかり助かったわけだ。他の諸君にもよろしく。地中海は実に平穩だ。(中略)明日の朝は早くポートサイドに着く。(中略)また、お願いがあるが至急日本に向けて、いつかお願いしたことのあるフェアブルの本を送ってこないか。リヨンで買ったはずなんだが、荷物を調べても見当たらない。帰るとすぐに翻訳しなければならないものなんだ。『自叙伝』の装幀を忘れるなよ」

この手紙を見れば大杉が「改造」に連載した『自叙伝』を単行本として出版する意志があったことは明白で、しかも装幀は林倭衛にたのむとフランス滞在中に約束事になっていたらしく「忘れるなよ」という念の入れようである。

さて、私の手元にある『自叙伝』は林が装幀をしたのであろうか。

この手紙が林の手元に届いたのは恐らく6月中旬以降だろう。当時の船便は日本郵船の箱根丸、榛名丸、フランス船のクライスト号、ノルマンディ号などで、大杉が上海から乗船したアンドレ・ルボン号も横浜からの船かも知れない。

横浜・神戸・上海・香港・シンガポール・ペナン・コロombo・ジブチ・ポートサイド・マルセイユという航路で所要日数は約1か月半を要した。したがって次の便との間隔は、1か月前後あったから、大杉と別れてすぐに装幀案を創り7月上旬の便に間に合わせたならば、震災直前に大杉宅に届く勘定にはなるが、どうも、この仮説は日程的に難しそうである。

巻末に貼ってある印紙に近藤の印があるのは、単行本発行の編集実務を近藤憲二が担当した証左である。近藤は二人の約束を知っていたか疑問である。

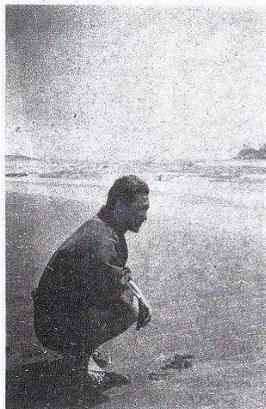
林が甘粕事件をフランスで知ったのは、おそらく10月に入ってからで、もし、

それから装幀案を作り送ったのなら印刷日の大正12(1923)年11月22日にはとても間に合わない。林の装幀かどうかは断定できないままである。なお、装幀ではないが、林の絵が口絵に使われている後の版があるのを先日インターネットで発見した。林はそれで約束を果たしたのかも知れない。

林は「仏蘭西監獄及び法廷の大杉栄」という原稿用紙130枚余の長編の回想文を12月30日に書上げ、それは『改造』大正13(1924)年6月号に掲載された。

口絵写真「鵠沼に於ける大杉君の閑日月」

この本は表紙を開くと「自叙伝大杉栄」とペンで縦書きにした、おそらく原稿の表に書かれた大杉の自筆と思われるページがあって、つづく5ページが写真である。最初は「労働運動終刊号執筆中の大杉君（望月桂氏筆）」という日本画でゆかたを諸肌脱ぎに立膝で机に向かいペンを走らせている図である。2ページは「大杉君及其の父母弟妹」として両親と子供4人が写っている。3ページは楕円形の写真で「中学時代の大杉君（後列向って右）」級友3人と和服袴に学帽をかぶり素足。4ページも楕円形の写真で「最近の大杉君」背広にネクタイ、フランスから帰朝した時の服装。5ページは「鵠沼に於ける大杉君の閑日月」として3枚のスナップ写真が載っている。2枚は鵠沼の旅館東屋の庭の池で釣りをしている。1枚は大杉が竿を垂れカンカン帽の男がしゃがみ脇に娘の魔子。もう1枚は大杉がしゃがみ、魔子とその背中にもたれかかって野枝が竿を握っている。3枚目は海岸の波打ち際で大杉ひとりしゃがんで海を眺め、江の島が少し写っている。この写真と同じ場所で横長の画



月日閑の君杉大るけに沼鵠

面の写真が『日本の名著 第46巻 大杉栄』に掲載されている。それには「鵜沼海岸における大杉栄。『自叙伝』を書きに来ていたのを同宿した久米正雄が撮影（1921）」とキャプションがついている。自叙伝の3枚も久米が撮ったものに違いない。着衣から見て時期は9～10月頃であろうか。

この年11月、原敬が東京駅で暗殺された号外を持った大杉が同宿の佐藤春夫にそれを見せている。

鵜沼東屋での大杉と交流した文人たちは、佐藤のほか、里見弴、宇野浩二、芥川龍之介、佐々木茂索、江口渙、中村武羅夫等で花札などをして遊んだ。大杉には常時警察の尾行がついていた。宇野浩二は『芥川龍之介』のなかで「さて、東屋ではこの「花」はいつも大杉の部屋で催された、大杉の部屋は二階の八畳で、誰の部屋よりも広々としていたからである。大杉の座敷からは、目の下に、東屋の庭が見下ろされた。その庭は全体が芝生で、その芝生の真ん中へんに池があって、その池のほとりに亭があった。それで、庭全体が箱庭のように見えた。さて、その亭は、小さい家になっていたので、入口もあり、縁もあり、全体が四畳半ぐらいの部屋になっていた。そうして、その部屋には、いつも二人の男がいて、その二人の男は、障子が開けてあるので、ときどき大杉の座敷を、じろじろと見上げた。それは大杉を尾行する刑事である。したがって、大杉がその二階の座敷にいれば、二人の刑事は安心して、その亭の部屋で休息できるわけであった。それで大杉は、私たちが花かるたをしている時、ときどき目に微笑をうかべて、その亭の方を見ながら、「あそこに番人がいるから安心だよ」といったと、当時の様子を活写している。この時期、鵜沼に住んだ岸田劉生も知己だったらしく、甘粕事件を知ると「大杉栄が甘粕という大尉に殺された由、大杉は好きではないが、殺されるのはよくないと思ってへんに淋しい気がした」と日記に書いている。

内容のあらまし

口絵写真に続いて目次。1)最初の思出、2)少年時代、3)不良少年、4)幼年学校時代、5)新生活、6)母の憶い出、7)獄中生活、8)葉山事件という8章からなっている。

このうち1)～6)が「自叙伝」として『改造』に連載されたもの。7)8)は自叙伝と別に発表されたものの転載である。7)獄中生活は「獄中記」の転載である。

「獄中記は春陽堂の厚意にて本書に録することが出来るようになった。茲に春陽堂の厚意を謝す」という巻末注記があるように大正8(1919)年に春陽堂から出版

されたもの。また8)葉山事件は「お化けを見た話」として大正11(1922)年『改造』に発表されたものである。

30歳代で自叙伝を書くという発想は、今日のわれわれではとても思いつくものではない。大杉は何度も投獄されていて、獄中では自身の幼少年時代が思い出されたのだという。だから最初に自叙伝の構想を持ったのは、なんと25歳、千葉監獄にいたころであった。

「この故郷のことが、自分の幼少時代のことがしきりに思い出される。ことに刑期の長かった千葉ではそうだった。僕は出たが、どうせ当分は政治活動や労働運動は許されもすまいから、せめては文学にかこつけて平民文学とか社会文学とかの名のつく文芸運動をやってみようかと思った。そしてその手始めに自分の幼少年時代の自伝的小説を書いてみようかと思った。軍人の家に生まれて軍人の周囲に育って、そして自分も未来の陸軍元帥といったような抱負で陸軍の学校に入った、ちょっと手に負えなかった一腕白少年が、その軍人生活のおかげで、社会革命の一戦士になる。というほどのはっきりしたものでなくても、とにかくこの経路をその少年時代のいっさいの腕白が、あらゆる権威に対する反逆、本当の生の本能的成長のしるしであったことを書きあらわしてみたい」〔続獄中記〕

というのが自叙伝執筆の動機であった。

葉山事件または日蔭茶屋事件

大正5(1916)年11月8日の夜とか午前3時頃というから9日の未明である。神奈川県三浦郡葉山村字堀内にある割烹旅館・日蔭茶屋(現在は葉山町堀内16番地、日影茶屋)で東京日日新聞記者だった神近市子が寝ている大杉栄を短刀で刺した事件である。

大杉は以前から文債が溜まると日蔭茶屋を仕事場にしていた。その時も翻訳を一つと雑誌の原稿を二つ抱えて一か月ばかり滞在の積りであった。当時、金欠の大杉と伊藤は神近からもらった20円で菊富士ホテルに投宿していた。それと別に大杉は後藤新平を訪れ300円を無心していた。野枝と別れてひとりで葉山に行くという大杉を神近は喜び「行くときは私と一緒に行って一日葉山で遊ぶこと」と条件をつけた。大杉はそれに生返事をし、実際には、茅ヶ崎にいる平塚らいてうを訪ねるといふ伊藤野枝と行動を共にし、日蔭茶屋で一泊する。翌日、東京へ帰るといふ野枝を引き留め、自動車で大崩へ、秋谷を散策して茶屋にもどり、一風呂浴びたところへ神近が押しかけて来たのだ。諸肌脱ぎで鏡台に向かっていた野

枝に神近の鋭い視線が飛んだ。3人で気まずい夕食を終え、野枝は帰京すると宿を出た。ところがホテルの部屋の鍵を忘れたと駅から電話があり、大杉が駅まで届けに行くが上り終列車は出た後で、2人は日蔭茶屋に戻って来て、一部屋に3人ならんで床に就く。

部屋の空気はもっといけなかったが何事もなく翌朝を迎え、朝食後、野枝はすぐに東京へ帰った。そして昼食が済むと、大杉はわざと原稿用紙に向かい、神近は仕方なしに女中の勧めで海岸へ散歩に出た。もう彼女ともおしまいだなと思いながら机に向かっていた大杉の執筆ははかどらず、神近はあざけるようにそれを見ていた。夕食後すぐに床を取ってもらい横になった大杉は、神近から不穏な気配を感じていて、それは短刀なのかピストルなのか、とにかく眠ってはだめだと思っていたが、時計が3時を打つのを聞いた後、咽喉のあたりに熱い玉のようなものを感じた。「やられたな」前を見ると部屋を出て行こうとする彼女が振り向いて「ゆるして下さい」と叫び逃げだした。その時の神近のあわれな表情が目に焼き付いた。「待て」と彼女を追いかけ宿中を追い回し、二人重なって倒れ、そこで気を失った。ふと気づくと血みどろで倒れていた。これはいけないと思い玄関へよろめいていった。しばらくして年増の女が来たので「医者を呼んでくれ。それから東京の伊藤に電話を。神近がいないが自殺するかもしれないから海岸を見てほしい」とそれだけのことを喉をひいひい鳴らして言った。それから自動車で逗子の千葉病院に運ばれ手術台に乗った。

「長さ…センチメートル、深さ…センチメートル。気管に達す」院長の口述を聞きながら「今日の昼までくらいの命かな」と思った。

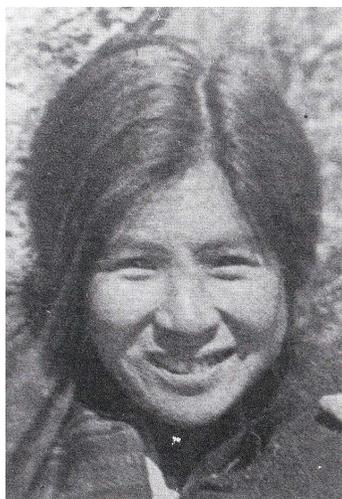
以上が、大杉が書く事件の概略である。

その後、半年余りの間、大杉は、刺して部屋を出るとき振り向いた神近の憔悴しきった顔を夢に見てうなされるのである。それは決まって夜中の3時頃で神近の怨霊であると大杉は思った。「お化けを見たはなし」と題した理由である。改造に発表した時期は自叙伝4)を書いた後5)を掲載するまでの間であった。

では、伊藤野枝とは、神近市子とは、どんな人物であったか。

伊藤野枝のプロフィール

戸籍ではノエ。福岡県糸島郡今宿で海産問屋を営む伊藤亀吉、ムメの長女、明治28(1895)年1月出生。13歳のとき家運傾き、叔母キチの嫁ぎ先、代準介宅に寄食。代準介は玄洋社の頭山満の遠縁にあたる。高等小学校卒業後、今宿郵便局に



「青鞥」時代の野枝。二十歳すぎくらい

就職したが代一家が東京に転出したので、自分も上京したく懇願。明治 43(1910)年猛勉強が実って上野高等女学校 4 年編入試験に合格。翌年、辻潤が英語教師として着任。45(1912)年、地元の末松福太郎と結婚するも、8 日後に出奔、東京に舞い戻り辻潤の家に飛び込み同棲、これが学校に知れて辻は解職。10 月青鞥社に入る。大正 2 (1913)年、男子出産、一（まこと）と命名。3 (1914)年夏、大杉栄と出会い惹かれる。4 (1915)年 1 月平塚らいてうの後を引き継ぎ『青鞥』2 代目編集長となる。11 月次男流二出産。5 (1916)年 2 月大杉と恋愛関係になる。3 月『青鞥』廃刊、9 月大杉と同棲、11 月、日蔭茶屋事件おこる。7 (1918)年、大杉と共同で「文明批評」創刊。10(1921)年、山川菊栄らと赤瀾会（日本最初の女性社会主義者団体）を結成。翌年解消、八日会となる。12(1923)年 9 月、28 歳のとき甘粕事件で扼殺された。大杉との間に 1 男 4 女を生んだ。翻訳にエマ・ゴールドマン著『婦人解放の悲劇』（エマはリトアニア出身の行動派アナキスト）また大杉との共著に、『乞食の名誉』『二人の革命家』、共訳にファールブル著『科学の不思議』がある。

神近市子のプロフィール

長崎県北松浦郡佐々木村字小浦で漢方医神近養齋、ハナの三女、明治 21(1888)年 6 月 6 日出生。2 男 3 女の末子である。3 歳のとき父養齋没。10 歳のころ一家没落。37(1904)年、佐々高等小学校卒業。同校代用教員となるが 3 日で辞め、9 月活水女学校初等科 3 年に編入。39(1906)年、中等科に進む。「少女世界」に小説を投稿掲載される。交友会誌に訳詩数編を発表。42(1909)年、中等科 3 年で退学し上京、受験勉強を始める。翌年 22 歳のとき津田英学塾入学。45(1912)年、万朝報の懸賞小説に『平戸島』を応募し当選。青鞥に加盟。大正 2 (1913)年、青鞥を脱退。3 (1914)年、尾竹紅



神近市子 (20 歳代後半)

吉と「蕃紅花」を創刊、東京日日新聞に入社。4(1915)年、宮島資夫、青山菊栄らと大杉栄の仏蘭西文学研究会に参加。11月大杉と恋愛関係になる。5(1916)年1月東京日日新聞退社。2月大杉に伊藤野枝との恋愛関係を告白され悩む。11月、葉山の日蔭茶屋で大杉を傷害、自首。6(1917)年3月懲役4年の判決を受け控訴。保釈後、宮島資夫と同居。6月控訴審で2年の判決。10月から八王子刑務所に服役。8(1919)年10月出獄31歳であった。翌年、鈴木厚と結婚。

以後、文筆活動、社会主義運動、婦人運動などを続け、昭和28(1953)年の第26回衆議院総選挙に65歳で左派社会党から立候補し初当選。その後、27、28、30、31回の選挙に当選。44(1969)年、政界を去る。56(1981)年8月1日没。

大杉栄と伊藤野枝の子どもたち

大杉は、妻堀保子との間に子をなさないが、伊藤野枝との間には1男4女を設けた。大正6(1917)年9月長女魔子、8(1919)年12月次女エマ、10(1921)年3月三女エマ、11(1922)年6月四女ルイズ、12(1923)年8月長男ネストルである。次女と三女が同名なのは、次女は生後間もなく大杉の3番目の妹、牧野田松枝に貰われて幸子と改名されたからである。のちに魔子は真子に、エマは笑子に、ルイズは留意子に改名したが晩年はルイと自称した。ネストルも栄とされたが生後1年足らずで夭折した。

なお、次女幸子は鵜沼の彫刻家菅沼五郎と結婚し、終生鵜沼に住んだことは、鵜沼を語る会誌『鵜沼』88号に「菅沼五郎夫人について」と題して故鈴木三男吉会員が書かれているし、「伊藤野枝はるかなる存在のひと」菅沼幸子として『定本伊藤野枝全集』第1巻月報からの転載がされている。

おわりに

大杉は自由恋愛(フリーラブ)論者で、神近も自由恋愛に肯定的であったから彼らは男女関係になる。大杉は、神近との関係が出来て数か月もたたぬうちに伊藤野枝とも恋愛し、野枝は長男一を辻のもとに残し、次男流二を抱いて辻の家をはなれ、一時、千葉県御宿に身を隠すが6月に流二を里子に出し大杉のもとに走った。今井達夫は『馬込文学村二十年』に「川崎時代の辻宅へ一度だけ宮島氏に連れて行ってもらったことがある。川崎の辻さんの家は僕に奇異な印象を与えた。現在の辻まことである小さな男の子がノエサン、ノエサンといていたが、それが彼の実母の伊藤野枝の事であった」と書いている。辻と小島キヨとの川崎同棲

時代だから震災直前であったと思われる。

辻は事件後ある雑誌社から野枝の思い出を書けといわれ「伊藤野枝ともN子とも野枝君ともいわないで僕は野枝さんという。何故なら、僕の親愛なるまこと君が、彼女——即ち、まこと君の母である伊藤野枝君を常にそう呼んでいたからなのだ」と述懐している。甘粕事件の当日、野枝は息子の安否を気遣い、大杉と二人で川崎の辻宅を訪ねたが留守だったので大杉の実弟勇宅に行き、互いの無事を喜び、そこにいた妹の子、橘宗一が「焼け跡を見たい」とせがむので同伴して自宅付近まで戻ったところを拘束されたのである。

大杉はエッセイ「生の拡充」第1次『近代思想』10号大正2(1913)年7月刊のなかで「生の拡充の中に生の至上の美を見る僕は、この反逆とこの破壊との中のみ、今日生の至上の美を見る。征服の事実がその頂上に達した今日においては、諧調はもはや美ではない。美はただ乱調にある。諧調は偽りである。真はただ乱調にある」と書いている。

瀬戸内晴美(寂聴)著、日蔭茶屋事件を扱った小説『美は乱調にあり』と、甘粕事件を扱った小説『諧調は偽りなり』は上記から題名を取ったものである。

(おかだ てつあき)

参考：引用文献

- 「自叙伝」 大杉栄著 改造社
- 「日本の名著 第46巻 大杉栄」 多田道太郎編 中央公論社
- 「大杉栄書簡集」 大杉栄研究会編 海燕書房
- 「関東大震災」 吉村昭著 文春文庫
- 「林俊衛」 小崎軍司著 三彩社
- 「神近市子自伝」 神近市子著 講談社
- 「伊藤野枝と代準介」 矢野寛治著 弦書房
- 「瀬戸内寂聴伝記小説集成 第4巻」 瀬戸内寂聴著 文芸春秋
- 「芥川龍之介」 宇野浩二著 文芸春秋新社
- 「岸田劉生全集 第8巻」 岸田劉生著 岩波書店
- 「藤沢の文学」 北沢瑞史著 名著出版
- 「藤沢文学年表」 藤沢市総合市民図書館編
- 「馬込文学村二十年」 今井達夫著 鶴沼を語る会
- 「鶴沼 88号」 鶴沼を語る会

25年振り 沖からの江の島

昨夏、葉山マリーナから江の島沖まで、クルージングを楽しんだ。その日はべた風で、まるで湖を走るように江の島に向かった。由比ガ浜、稲村ガ崎、七里ヶ浜の海岸を遠くに眺め自転車



ほどの速さで船は走る。赤潮が時たま見られ、これだけ沖に出ても水は澄んでこない。もっときれいな海を思い浮かべていたので、ちょっとがっかりした。でも水面の風は心地よく陸上での暑さを吹き飛ばしてくれる。

平日とはいえやはり夏、何艘ものヨットや水上バイクと行き交う。やがて江の島ヨットハーバーに近づくと、消波ブロックがびっしり防波堤を埋めている。左手に岩屋の入口の屋根がふたつ見え、江の島のくびれたところが目の前に広がってきた。切り立った断崖は昔ながらのものだが、その上に見知らぬ大きな建物が現われる。ずいぶん緑が失われ、建物だけが妙に目に付く島になってしまった。

これが25年振りに沖から見た江の島の印象だ。いつのまにか慣れ親しんだ眺めが変わってしまうのは悲しいことだが、これも時代の流れというものか。(弥)



生まれ変わった銘板 — 記念樹「枝垂桜」

昨年12月の例会で、「会の創立30周年記念植樹の銘板が腐食しているので、修理したらどうか」との意見が出された。これは会員も以前から気になるところであったので、皆が賛成した。この枝垂桜は平成18年3月14日、会の創立30周年(平成17年)を記念して植樹したもので、圓乗院(さいたま市=旧与野市)の樹齢260年の千代桜(せんだいざくら)と同種である。

この銘板の修復には森岡、守谷会員が手を挙げ、早速実行に移された。約10年を経過した分厚いケヤキ板は、上部及び内部が思ったより腐食、蟻が出てくるほどだったので内部に樹脂を注入、表面は丁寧に磨き直し、クリヤー塗装・文字に色を入

コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク

れ直した。特に板を円柱に取り付けたボルトが内部で錆びて抜けず、やむを得ず地面から柱ごと抜いて自宅へ持ち帰るなど、苦労が多かったようだ。会員お二人の木工芸に対する深い知識と努力により見事に仕上げられた銘板は1月27日設置され、今後も長きにわたり「鶴沼を語る会」の名を知らしめてくれるだろう。今年の開花が楽しみである。(ありた)

「遥かな友に」誕生の地の記念碑を訪ねて・・・思い出したこと

遥かな友に

♪ 静かな夜ふけに いつもいつも 思いだすのは おまえのこと
おやすみ やすらかに たどれ夢路 おやすみ 楽しく 今宵もまた

昭和20年代の終り、まだ高校生だった頃、藤沢市内のある混声合唱団に入っていた。当時は娯楽らしいものも無く、歌の好きな若者たちは練習が楽しみで、その日は夕方から夜にかけ合唱に熱中し、練習の最後にはこの「遥かな友に」を歌って帰途についたものだ。旧藤沢公民館の二階での練習だったがまだ歌い足り無かったのか、藤沢駅方面まで夜の遊行通りを歌いながら帰ったことも若かった日の思い出に残っている。鶴沼に住まわれ、いろいろご縁の深かった磯部倅先生が、早稲田大学グリークラブの指導をされていた頃、このグリーの男声合唱団が合宿していた道志川畔でこの「遥かな友に」を作曲されたそうだ。

“道志川のどの様な所でこの歌が生まれたのだろうか”と思いつけていた折、縁あって、「語る会」でその地を訪れ、記念碑のある所に行ってみよう、ということになった。実際行ってみると、昭和20年中頃の合宿地だけに、少々予想外の所でもあったが、その頃の話聞いてみると — 車の通る上の県道からかなり急な九十九折りの坂道を川沿いの合宿所まで、当時のグリークラブの若者たちが大声で歌いながらやって来る姿、早稲田の四角い座布団帽をかぶり、白いYシャツの袖をまくりあげた一連隊 — が目に浮ぶ。戦後の名残がまだまだ消えぬ頃、合唱に燃えた彼等が過ごした自然そのままの中での数日はどんな日々だったのだろうか。その頃、夜の街なかを歌いながら帰った、これ又かつての若者たちの心の中にも今まだ多くの合唱曲が生き続けている。(K.S)

コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク

「遙かな友に」誕生の地 道志川を訪ねる

守谷 俊博（会員）

鵠沼の地が生んだ音楽家 磯部 俣が昭和 26 年 7 月 12 日に作曲した『遙かな友に』は、私達の年代の者にとっては音楽の授業で歌ったり、音楽番組等で幾度となく聞いてどなたも口ずさむ事の出来る曲であろう。

静かな夜ふけに いつもいつも 思いだすのは おまえのこと
おやすみ やすらかに たどれ夢路 おやすみ 楽しく 今宵もまた

この曲は早稲田大学グリークラブの夏期合宿中、学生達が暗闇の中で就寝前の枕投げの悪ふざけをしている最中に床の中で作詞作曲をした、と云うエピソードを聞かされ驚いた。この合宿地・道志川夫婦園キャンプ場で生れた事により、作曲年月日までが判るのかも知れない。

「遙かな友に」をネットで検索すると動画サイトには、この合宿に参加した早稲田グリークラブ OB による男声合唱があり、今から 63 年以上前の往時をしのぶ



「遙かな友に」誕生地・夫婦園キャンプ場

ご老人も歌われており、「遙かな友に」が脈々と生き続けている事を実感した。

会員の佐藤 和子さんから磯部 俣先生を知っていますか？と訊かれて、息子さんの磯部 周平さんとは湘洋中学の同級生であり、その頃お宅にお邪魔した覚えもあり懐かしく思い出した。彼は中学の音楽部では木管をやっていて知らない者はいなかったと思う。小生はその湘洋中学の校歌は磯部君の親父さんが作曲したと、ずっと思っていたが、調べると間違いで鵠洋小学校（小生は卒業生）の校歌を作曲されたとの事で地元鵠沼にその業績を留めていた。

今回「遙かな友に」誕生の地 道志川キャンプ場にその碑が在り、現地を訪ねるド

ライブ企画があるとの事で、上記の縁もあり是非参加したいと手を挙げた。

2014年11月19日、風もなく快晴に恵まれ、宮ヶ瀬湖を経由し2時間程のドライブで道志川沿いの夫婦園キャンプ場に立つ。国道413号から500m程急坂を降下し川面の見える所にコテージがあった。



磯部 倅による題字の記念碑

駐車場の先に合唱曲「遥かな友に」磯部 倅作詞作曲50年記念の白い石碑(H1.2m W1.5m)が目に入る。碑の前に立ちまじり思った事は、物事は三現主義(現場、現物、現実という「3つの現」を重視する考え方)でないと理解・解決出来ないな、と云う事だった。

現場に立ち昭和26年の此処はどんな所だったのだろうか？ また神奈川のチベットとも思われる青根集落からも徒歩1時間は掛かりそうな場所である。当時の食糧事情の悪さから合宿に行くにも米・味噌等は持参して参加したのではなかろうか？ 現地へ行くには国鉄横浜線の橋本駅から出たバスに乗り城山町、津久井町を抜け三ヶ木のバスターミナルまで来て、そこから乗り換えたバスで青山の集落を通り道志川右岸沿いの県道(現国道413号)を辿ったのではないかと考えた。

小生が青根に初めて来たのは昭和56年頃、三菱ジープ(J54)で青山・鳥屋から山中湖・平野への県道を走った。道は現在の様な直線路ではなく道志川の右岸・左岸の集落の中に大きく回り込む蛇行路で、路面は未舗装砂利敷き、路巾は狭小。その上、樹木が被る山伏峠越えではステアリングを右に左に回し、悪路を山中湖に着いた時には疲れ果て、四輪駆動車でも難儀し再訪しようとは考えない場所であった。

この県道は後日、国道に昇格し国道としての規格となった。7年程前に日産サファリ(Y61)で夜間走行する機会があり、爽快に駆け抜ける事の出来る道路になっていた。往時の悪路を思い出させるものは何も無かった事は云うまでもない。

昭和26年の小生は2歳で当時の記憶があろうはずの無い世代であるが、戦後の混乱期で文化にも食糧・衣料にも飢えていた時期に、大学生と云う「特権階級？」にあった若人が今の尺度では到底測れない思いを背負ってこの地へ来て、磯部先生の導きのもと秋に行われる学祭へ向けた楽曲の纏めに3日間掛け、集中練習でも行ったのであろう。現地に来るまでの苦難が偲ばれる場所だなどキャンプ場下

の溪流に立ち、バーチャルで昭和 26 年の風景が想像出来そうな思いに駆られた。ここからはエスケープ出来ない「陸の絶海の孤島」だったと思われる。このような場所故に雑念を払った心境になれてこそ出来た友を想う純真な曲なのであろう。

溪流から空を見上げると抜ける様な青空で、兩岸からは広葉樹の紅葉が始まり、高い山々が秋色に染まる場所で 60 年前の磯部 俣と同じ地に立ち時間を超えて「遥かな友に」を歌った。

夫婦園キャンプ場からの坂道を喘ぎながら国道に戻り、その先の青根・緑の休暇村に向かう。そこにはボニージャックス等の働きかけで建立された譜面と歌詞



の刻まれた白御影石の大型石碑が在り、この場所では毎年夏に磯部 周平氏プロデュースによる「遥かな友に」音楽祭が行われており、半世紀を超えて歌い継がれているとの事。この歌碑前で熱いコーヒーを頂き、鵜沼ライスのほっくり美味しい握り飯で、ひと心地つける事が出来た。

津久井町青根に建てられた「遥かな友に」の歌碑

今回のドライブには磯部 俣先生の甥にあたる吉岡 美和さんが同行され尊敬する叔父の記念歌碑現地見学に参加頂き、往時のお話を伺った。この吉岡さんによる平成 25 年 7 月の講演と磯部 俣の生涯については会誌『鵜沼』107 号に詳しいので、こちらを参照されたい。

帰路は国道 413 号を西進し山伏峠を越え、山中湖畔にある森岡会員の別荘に立ち寄った。別荘の建物は富士吉田の大工と彼がリフォームしたものであるが、内部造作や建具等は自己調達し、その取付迄も自分で行いアーティスト森岡の感性に溢れた別荘である。ここでひと休みし 120km のドライブを終え、夕暮れの鵜沼に到着。

今回、青根まで走行して思った事は「青根は遠い」。公共交通機関で鵜沼から行くとなると、どの位の時間が必要か？ ルートは？ となり、心が引いてしまいそうになる。幹事さんの企画で 7 名の会員が楽しく「遥かな友に」誕生の地に立てた事に感謝したい。

(もりや としひろ)

編注：1986 年、津久井町・青根の里に「遥かな友に」の歌碑が建てられたが、その後、この合唱曲が誕生した夫婦園キャンプ場(数 km 下流)に、作詞作曲 50 年を記念した石碑が建てられた。

子どもの頃の遊び

鶴沼地区公民館まつり 2014年10月18日-19日

むかしの子どもの頃の遊びを思うとき、懐かしさやほほえましさだけでなく、遊びは人間形成の大きな糧となり、人生を豊かにしてくれていたことを感じます。

まだ鶴沼のあちこちには原っぱ、松林、田んぼや池などがあり、子どもたちの遊び場に困ることはありませんでした。むかし子どもたちは、兄弟姉妹、隣近所の子や学校友だちと一緒にあって、それこそ暗くなるまで野外で遊んだものです。今のようにいろいろな遊び道具に恵まれている時代ではなかったので、遊具も手作りしました。それらの作り方や遊び方は、年長から年下へと受け継がれていったのです。

鶴沼を語る会は、昨年10月開催の公民館まつりで、「子どもの頃の遊び」をテーマに、会員が子どもの頃のことを思い出しながら作った遊具や、まだ家に残っていたむかしのおもちゃ類を集め持ち寄りました。あわせて遊び方のイラスト30点以上を展示、プレイコーナーも設け来場した子どもたちと一緒に「子どもの頃の遊び」を楽しみました。



子どもの頃の遊びの様子をイラストで表現、併せてむかしのおもちゃを展示

子どもの頃の遊び



むかしを思い出して…



糸電話 ビー玉 けん玉 紙ヒコーキ



お手玉 割箸鉄砲 リリアン 糸巻きタンク 輪ゴム鉄砲



羽根つき 大山独楽 パチンコ メンコ



輪投げ チャンバラごっこ 缶馬 水鉄砲 紙鉄砲 杉の実鉄砲
吹き矢 軍人将棋 松葉すもう 椿の実の笛 ウグイス笛 樟脳舟

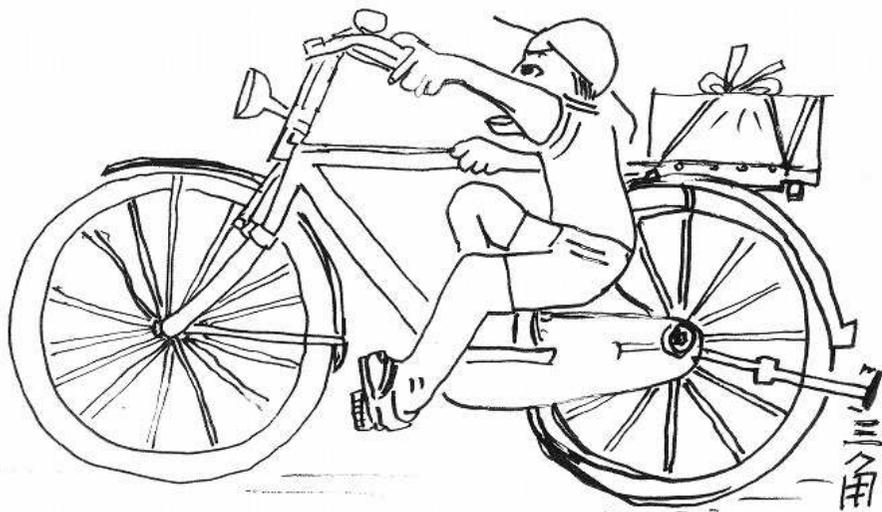


トランプ かるた 輪回し 竹とんぼ 自転車用プロペラ 兜 あぶりだし

イラストでみる「子どもの頃の遊び」

イラスト：森岡 澄(会員)

自転車の三角乗り



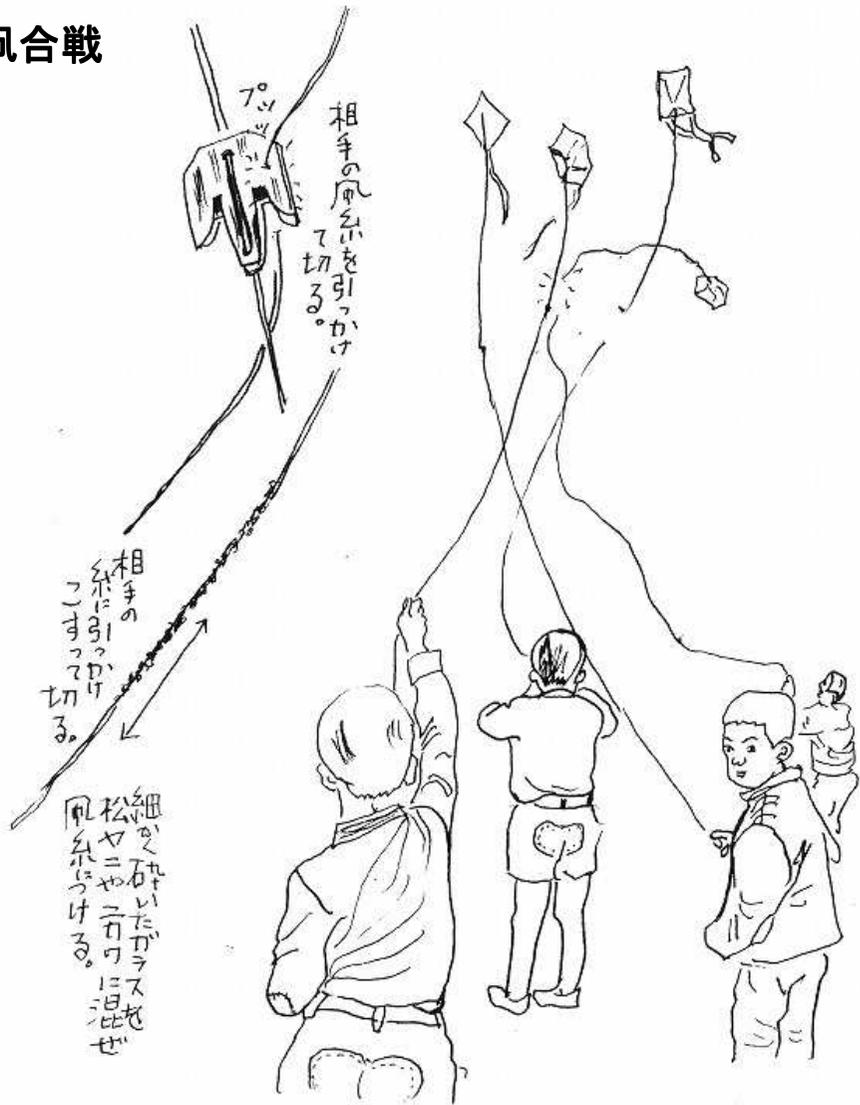
子どもの自転車は
なかつた。幸い大人の自転車
で三角乗り

草木相撲

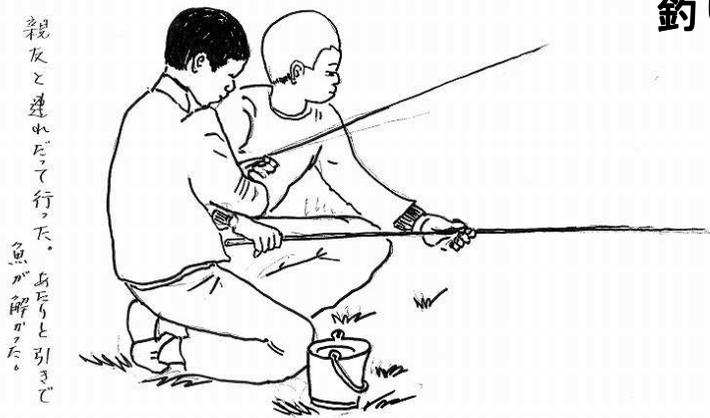


草木相撲にはどんな
草や木でもよかったです
茎を折ってみると柔らか
く竹節の多いものが強かった。

凧合戦



釣り



川辺で魚捕り



木ハ心相の底にガラス
をけり 心相メがネ
水面と呼んだ。
大切な仕事道具。

自転車をスネうて
作ったヤスや水中鏡で
川底の石陰や淵にいる
魚を突いた。

魚つり



竿も自分たちで

笹船



笹舟で遊んだ

メダカ掬い

もしめんこで
メダカを掬った。



トンボ捕り



小石を紙で包んで
二本指にひっかけ
空高く投げると
トンボがからまって
おぼろしくなる。

ナンコ

じいずまに限らず、本々家で
 買ってきた、円を囲んだ、こどもたち
 ンれぞぬら、伯持ちとか、伯持ち、ソア、ソア、か、決めた、数を
 手に握って、一斉に出し、ソア、合計数を当てこする。



馬跳び

こねでも、跳べっかノ



がかし、一本足で、着地



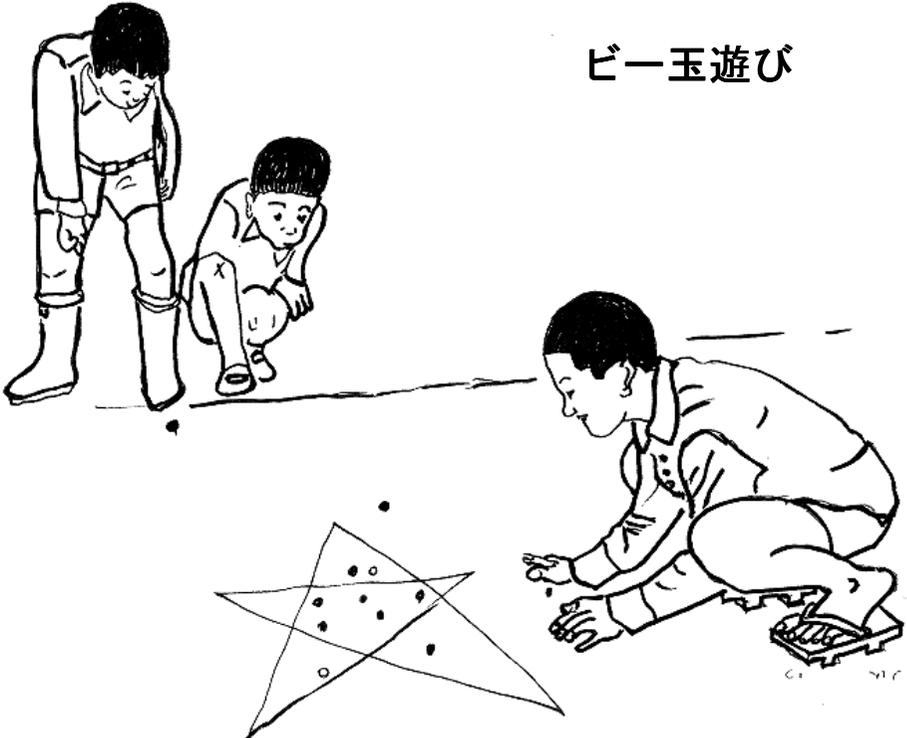
クギ遊び



五寸クギを出し、
順番にクギを投げ
てぼじり飛ばせば
五分の玉にできる。

ビー玉遊び

ビー玉
弾き飛ばして競い合った。
玉がまた図柄がある。



貝つり



あぶりだし



紙風船



毬つき



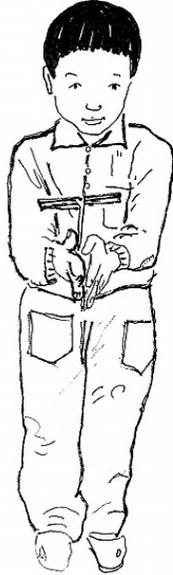
馬のり

経年ほどに
激しくなつて
ゆく



竹とんぼ

竹とんぼをしっかりと
握る子もたはす

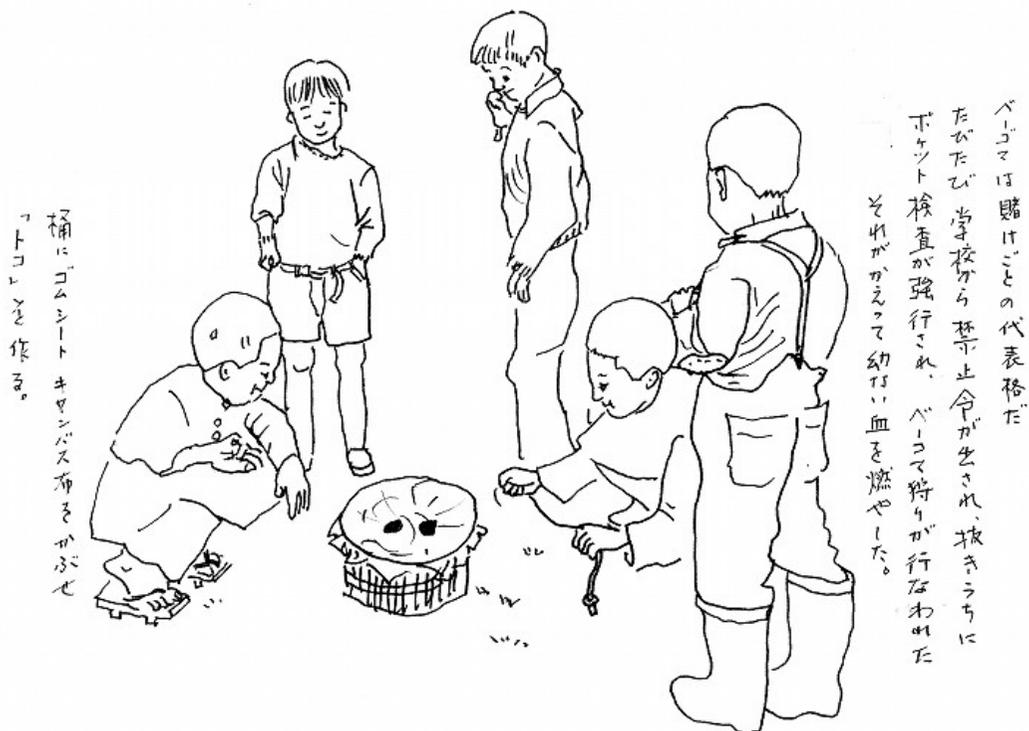


羽根だけを
飛ばす

独楽まわし



ベーゴマ



おんじょ捕り



蜘蛛の糸を張り雄のやまを捕った。
 雄のやまをとおとりに木の枝に

松葉相撲



松葉相撲

ボール皿を蓋かえして
 土俵を作り表面
 をツルみかきとれとん
 だいて勝負した。

竹馬

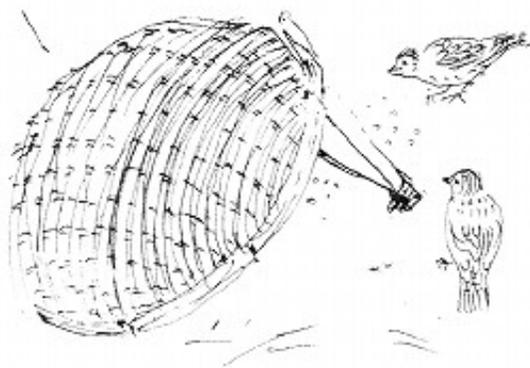


雀とり



もともとも易しい捕獲法「バツツツ」
 で支えに打つ棒にザルを
 灰マカリその下に餌を置いておく
 物陰から見張り、支えの棒に絡
 んだ糸を長く伸ばし

忍前と根気
 遊んだら



竹馬

缶詰をやらに食べた時代があった。



塙や電柱から歩き始める
上手になると馬をだんだん高くする。巨人になった

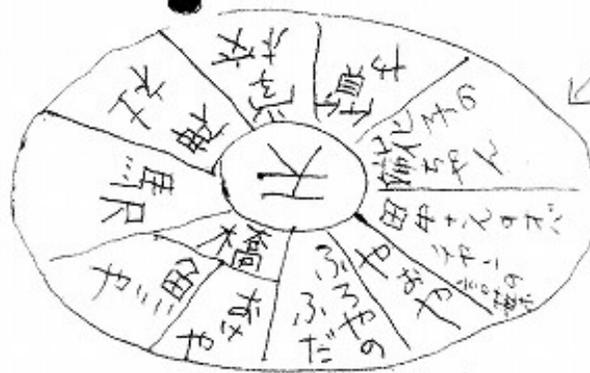


たが廻し



古車輪の輪や
樽のたが
も回しながらじっとまわしてもえさ。

石蹴り



蹴った石が
行った所へ行き
証拠を持ち帰る。

メンコ

ルールは単純に相手のメンコを裏返せば勝ち。



比較的広い場所少々凸凹や
小石などがあつた方が面白い。

ケン玉

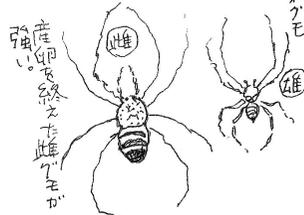
玉を振つて剣、大皿、小皿、本皿
剣先で受けて遊ぶが、歯足多ハロウ
に聞き、膝を柔らかくして、滑り玉を
上半身に反動をつけて、玉を操作する。
長く続けるには、黙練が必要。



草木のお面



悪い遊び 虫編

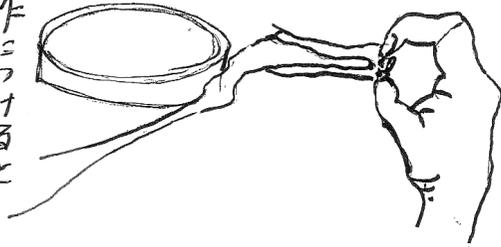


カエルの足
カエルの舌

うなぎの餌づくり



酢につけると
 大夫なテグス
 がとれる



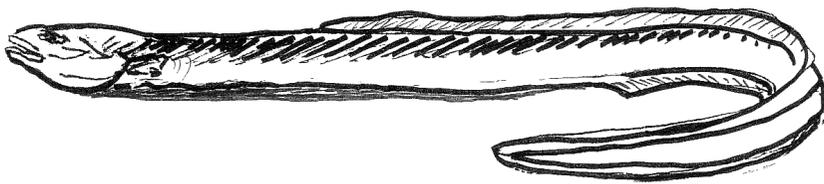
ピアノ線で釣針
 をつくる



蛙で蛙を釣る



蛙の尻で魚を釣る。



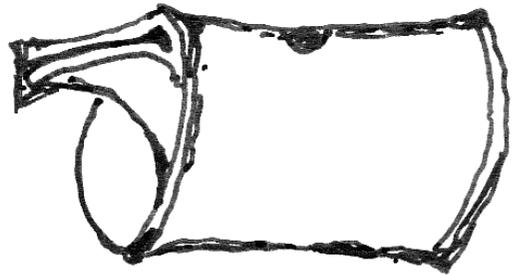
子どもの頃の記憶

森岡 澄 (会員)

公民館まつりのテーマ「むかしの遊び」のことを考えていたら、長野に疎開をしていた頃や、逗子で過ごした子どもの頃のことが、ふつふつと湧いてきた。

疎開先でのこと

教室に入ると側に棚があり、竹製の水注ぎが置いてあった。太い孟宗竹の節と節との間を残して一方の節の方に、鳥の口ばしのような溝を掘った注ぎ口を削り出し、胴体の真中に穴をあけ、底はすわりのよいように平に削った湯たんぼ位の水入れがあった。これは何もない殺風景な教室の、唯一の道具であり置物でもあった。習字の時間に当番はこの水注ぎを持って、きちんと、正面を向いて待っている生徒たちの、硯に水を注いで廻った。たくましい丸味と膚の色と節の強さ、鋭いが愛らしい注ぎ口に、両の手で持った加減は、子どもには少々大ぶりだった。



一体誰が竹の中からこんな用途をさがし出したのだろう。この水注ぎは人が作ったとはいいながら、実は竹そのものが始めから水注ぎにできていたとあってよかった。すべては水注ぎになるように、竹は用意されているとあってよかった。

人はそれにほんの少し手を加えただけであった。これこそ物の形の生まれ出る秘め事の一つであるに違いないと思った。与えられた物の中に自分をそっと入れるだけであった。私たちの周りには、こうして出来た形が如何におおいことか……

すべてのものは人のために、次の形が用意されているに違いない。当番は先生のすきまをみて胴体の穴に口をあて、プーッと吹いて、しかめっ面して机に向っているいたずら相手の顔に、水を吹きかけた。水は銀色の光の紐になって気持ち良く飛んで出た。どべ墨といった大きな駄墨、これは摺るとざらざらと音がして墨と硯はどちらも、薬研のようにへこんだ。

それから筆も筆であった。犬の毛を束ねたばさばさした筆は書くほどに毛が抜けた。手の平に卵を包むように、そっと持って！と教えられ習字帳は新聞を四つ折りに一帖位に綴じ、書いた上に書き、またその上に書くものだから、真黒に光っていた。筆を真っすぐに立て、何を書いても解らない黒い紙に、一点一劃ゆるがしにせず、下腹に力を入れて無念無想で書かねばならないのだった。

子どもたちにとって、この謎が解けるのは余程後のことで、気付いてみれば子どもたちを一様に、日本人につくりあげる、これも亦不思議な手段に違いなかった。でも然し、こんな大切な謎の時間の隙間をぬって、音も立てずに、墨の付け合いをしたり、授業が終わってみれば、そこそこにその痕跡が残っていた。

竹法螺(笛)があった、「物売りの合図」だったとおもう。甘露竹があった。ほおずき提灯をともした夏祭りの屋台に積まれた二十センチ程の青竹が、それである。買い求めると錐で底の節へ穴をあけてくれる。口をつけて吸うと甘い竹の匂いと一緒に水ようかんが口の中にひろがった。吸いつくした後の青竹を捨てる子どもは居なかった。一週間もすると水鉄砲や木の実鉄砲、笛やカタカタ、それぞれに工夫をこらした作品を見せ合った。(長野県小県郡長窪古町の小学校二、三年の頃)

逗子での竹あそび

子どもたちは、どんな竹はどこに生えているか、よく知っていた。沙魚釣の竿を作るには、桜山の寺の裏手に、布袋竹を取りに行った。布袋竹の節から、竹の不思議な精根と力を知った。矢竹は披露山に群生していた。笛作りの名人(老人)に様々な笛作りを教わった。子どもたちは桶屋が良質の竹の端材を出すことを知っていた。貰ってさまざまなものを作った。竹とんぼも作った。いつもポケットに小型のジャックナイフが入っていて、竹とんぼの飛び具合を調整した。やがて竹ひごと桧棒、糸ゴムを使ったプロペラ飛行機へと発展してゆく。

茜色に染まった空に、竹とんぼやプロペラ飛行機が黒い点になるまで遊んだ。その夜、子どもたちは、よく空を飛ぶ夢をみた。足で地べたを蹴るとからだが浮き上がり、水平になって泳ぐように手を動かすと何処へでも飛べた。水の中と違って何の抵抗もなく、重さのない自分、自分のない自分。そういう自分がそこに居ることだけは、理解していたような…。

(もりおか きよし)

戦後 70 年 終戦時を顧みて

綿谷 克延(会員)

私は今年 83 才を迎える。戦後 70 年にあたり、会員の皆さんも数々の喜怒哀楽の人生ドラマがあったと思う。私事を記してみると終戦の玉音放送を聞いたのは中学一年のとき、母の生家現在の埼玉のある田舎(当時は郡村名)、昭和 20 年 8 月 15 日のことであった。

今日正午から天皇陛下より全国民にラジオを通し聖戦のお話があるということで、一同座してお言葉を待った。一台の昔ながらのラジオの前に大人ばかり 10 人以上が集まって聞いた。電波の影響で音声がときたま、ガアガアとなり、天皇陛下の言葉が聞きづらく、涙声が混じったように聞こえたがハッキリと聞きとれなかった。

前日に東京都庁より帰宅の従兄より、終戦の言葉だと聞いていた憶えがある。しかし日本国は神国であり鬼畜米英に絶対服することはないとマインドコントロールされて育った時代だったので、信じることはできなかった。但し、都心は勿論、広島、長崎には新型大型爆弾が投下され一面の焼野原で死傷者大多数と聞くに及び、元寇神風は何時吹くのかと不安な心を抱かざるを得なかった。詔勅は期に反し、結果は敗戦降伏の旗印で啞然とした思い出がある。

戦時中、わが家は旧千葉駅前にあり、昭和 20 年 7 月 7 日夜半、市内外共、焼夷弾投下に見渡す限り全て焼野原と化した。戦災当夜、わが家の手造り家庭防空壕避難では困難と察した父の誘導で、約 500~600m離れた山手の山穴防空壕に一家で避難した。併し、もうもうたる硝煙で息をするのも苦しい。父は持ち込んだ酒を手拭いに浸し各自の口にあてがい、一同は苦難を凌いだ。一夜明けた道路には避難に遅れた人の黒焦げになった焼死体が横たわり、如何に昨夜の火災猛火が熾烈であったかを物語っていた。

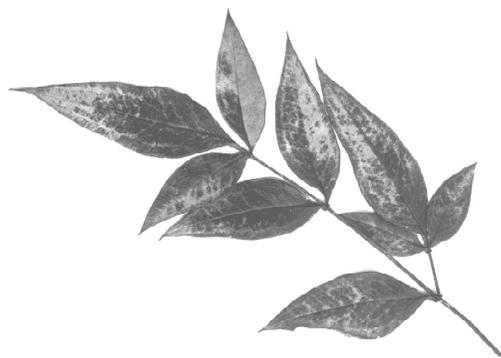
全焼したわが家は罹災証明を受け、取り敢えず父の実家、栃木の片田舎に身を寄せることにした。だが、父の勤務先の役所が東京から浦和に移転、父は一人上京、そのため母と妹も埼玉の母の実家に移転した。私は一人、父の実家から 5 km 位離れた中学に通わざるを得なかった。父が如何なる手続きをしたか不明だが、小学校時代の通信簿の成績が良かったせいか、無試験で県立中学に転入が認めら

れた。だが、通学に要する全てのものを失っており、疎開先の近隣同中学に通っている同学年生宅より教科書を借り受け、夏休み中、鉛筆で全て写し学んだ憶えがある。但し、英語の書き写しには最難儀を要した。結果、一学年の成績は決して良好とは思えないものだった。それは学校から戻った後は、父の実家の農作業手伝いも多々あり、勉強部屋もなく暗い電燈の灯りで予習も捗らず、日々苦難の日が続いた。

兄が大学卒業と同時に愛知県知多半島の先端にある高射砲隊に入隊したが、終戦で無事帰還。軍靴、雑囊鞆を兄から貰い受け、惨めな姿で通学していた思い出がある。併し、父の役所の寮が埼玉県与野に完成し、栃木の中学も一年半で終了、一家が一灯の下に揃う事が出来る様になった。栃木の県立中より埼玉一の県立中への転校手続きに際し当然、転入試験があった。だが、試験問題を見てあまりにも格差大なることを知り、英語問題はまったく零点に近く不合格。父も埼玉一の中学転入を薦めた失敗を認め、私学を受験した。

私の人生は、そこから始まったといえよう。

(わたや よしのぶ)



ヘビとの長いおつきあい

今井 達夫

そいつの姿をはじめて見たのは昭和二十六年だったから、すでに二十年になるわけである。と書き出して、私は二つの疑問におそわれた。

そのとき見たそいつが、はたしてその後毎年あらわれるやつであるかというのが、第一のそれである。つまり、蛇の平均死亡年齢についての知識を欠く私であってみれば、そいつがその後二十年も生き長らえるや否やたしかな自信を持って断言できないのだ。第二の疑問はそのときはじめてその姿を見たとき書いたのは、いささか不用意で観念的な描写だったと恥じる、——そのとき姿を見たのも嘘ではないが見たのは姿だけではなく、確かにそいつと目が合ってしまったと書かなければならなかったのではないかということである。

その証拠を云い立てよう。玄関を出て門へ向かう途中そいつは庭の草むらからとなりの屋敷の空地へと横断中だったが、目が合ったとたんそれまでののんびりとした前進速度に突然狼狽を示し、全身を緊張させて走り去ったということである。私の住んでいる鶴沼は砂地だから、敏感なそいつの耳も到底私の足音を聞きつけたとは思われない。してみれば彼を驚かせたのは、どうしても不意に合った私の目ということになる。云い忘れたがそいつは中くらいの青大将であった。

それ以来毎年私は一度以上そいつの姿を見る慣わしを持つことになった。どこにどういうふうに住んでいるかを知らないが、雑草だらけの松林のまんなかに家を建てたのが気にさわったのか、はじめのころは抗議デモの気味があり台所へ上り込んで冷蔵庫の蔭に数時間滞在という年もあった。また、空気抜きの穴から天井裏に這入りこみ、いないと思っていたねずみを取ったらしいその悲鳴とドタバタ騒ぎを起こしたこともある。しかし、この出来事は忖度してみると、そいつの誤解が出發だったようだ。そいつにとっては食料であるねずみを、この家でも飼育しているなら嫌がらせをやってやれ。こうなるとエデンの園でアダムとイヴをだました蛇知恵に対して、首をかしげたくなる。

そのうちに家を建てたとき植えた藤の伸ばした蔓のはびこりが、八畳敷ほどの

棚になった。このころになると、そいつはいくらか妥協的になりはじめ、裏庭の雑草の林と云いたいほどの茂みをつたって家人を驚かしたり、すこし図に乗って表庭のつつじの枝に乗って高見の見物を試みたりするのをやめ、もっぱら藤棚に昼寝を楽しむようになったのである。いや、このつつじの枝で高見の見物時代のそいつには、まだデモンストレーション気分は十分あったとおぼしい。それを感じたせいで咄嗟に石を投げて警報を発すると、そいつはそばの松の木に素早い動作で登りはじめた。素早いばかりでなくからだをうねらせる恰好は、あたかも古人の竜の昇天図そっくりで目をみはらせたものである。そいつは高い梢にとまり、見物人が飽きたころやっと移動をはじめ消えて行った。

これら並べた例によって得た知識は、そいつが必ずしも「地を匍う」だけの「もの」ではなくて、そういう高いところも辞さないばかりか好むところもあるということであった。高い松の梢は逃避であったろうが不意の襲撃に対して取った行動とすれば、私の解釈も納得されるであろう。そして、このとき以来妥協的になったとおぼしいそいつは、藤棚で昼寝をするようになったばかりでなく、両三年後には完全に恭順の意を表する白旗を掲げて見せた。恭順の白旗とは、藤棚の一隅にぶらさげた脱殻である。

あるおそい朝（この時刻も問題になる）ふと見上げた藤棚にそれを発見した私は、その瞬間にそいつの胸のうちを理解し思わず凱歌をあげたがその中身はすでに姿を消したあとであった。そして、その白旗はその後毎年の挨拶になって私の期待にそむかなかった。私はそいつがいつどんなふうにして一皮脱ぐのか好奇心にそそのかされ、翌夏は柄にもなく早起きしてみたが、どっかい相手もさる者どうにも現場を押さえさせない。いつの間にか白い脱殻を涼しく風にゆらがせているばかりであった。

そして三年前のことだが、毎年一本づつの習慣を破って棚の二つの隅に二本、三日のうちにぶらさげたのである。ここで私は蛇についての無知をさらに暴露しなければならなくなった。一体、そいつは一年に幾度そういうことをするのかという素朴な疑問からはじまって、これは私に対して結婚を告げるためであろうか。今年まで毎年顔を合わせて来たやつは、はたして雄だったのか雌だったのか、今までずっと生きのびて来たのか、すでに何代目かになっているのか、等々。考えてもわからないのは当然の私である。そいつに見破られないうちに、いつどんなふうにして脱殻をぶらさげたかを知っておけばよかったと悔いても、もはや手遅れだった。もしその現場を見ていたら、切り札はこっちにあったのだなどと今更

いうのは愚痴である。好奇心の強い方だと自覚しているのに、この怠慢は許しがたい。

しかし、私は長年のつきあいのある方を雄と考えることにして、結婚報告を快く受けた。そして、来年は子蛇たちがちょろちょろと親たちのあとにつづいてあらわれるのではないかと期待し、——というのは嘘だ。そいつに聞えないように小さな声で白状するが、私はそいつらたちとそういう親類づきあいみたいな真似はまっぴらなのである。考えただけで全身の皮膚がちりちりとちぢむのである。それにもかかわらず、たびたびそいつのことをあげつらっているのは怖いもの見たさ、——ではない。おせじを取ることで、何とか間隔を保ちたい必死の願いからであった。

ところで、去年私は正月から八月一杯家人ともども不在、あとの留守をまもってくれた人の報告によると、そいつが小さいやつを連れて現れたとのことである。そいつがどんな様子だったか、小さいやつはと訊いてみたが、その人もそいつらと親類づきあいはあまり得手ではないらしく、大変あっさりした話きり聞けなかった。その話によると、大きいやつの方は藤棚から廂に乗りうつったが、それを真似た小さいやつの方はやりそこなって廂から濡縁の万年青の鉢に落ちたとのことである。

「その先は怖くて見ていただけませんでしたの。申し訳ありません。」

私の好奇心にこたえられないことを詫げる言葉を聞いて、私はつづこうとする質問を中止した。わたしもまたそいつのいないところであまり好奇心を働かすことは、そいつの誤解を招き、それならばと親しく身をよせられそうな気味悪さを感じたのである。——いや、それなら今年も出て来るでしょうから、そのとき対面しましょうと私は笑ったが、もう八月中旬だというのにそいつ及び小さなやつは一向姿を現さないばかりでなく、去年は一本だけれども相当長いのをぶらさげたという脱殻もまだ見せようとしなない。

この分では、今年は待ち呆けだろうか、そいつは馴染の私が顔を見せなかったのでどこかへ行ってしまったのであろうか。とすれば蛇知恵はますます底が浅い、などと悪口をいうのは、それと知っての来訪を待つ気分からである。去年の蛇今いずこ、——私は声なく呟きながら、一日に幾度も藤棚を見上げている。

(いまい たつお)

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成 26 年 10 月～平成 27 年 3 月) 総務担当

平成 26 年 10 月例会 10 月 7 日(火) 10 時～12 時 18 名出席

公民館まつり準備に伴い、第 2 火曜日は部屋の使用ができず、第 1 火曜に変更。

司会進行 有田会長

議題 1 会誌 109 号 — 出席者に席上配付した。欠席者には従来通り別途配付。今号以降も運営委員会で会誌編集制作チームをつくり、作業にあたる提案がなされた。

議題 2 公民館まつりについて — テーマは「子どもの頃の遊び」と決まり、子どもの頃にどのような遊びをしたかを当時の遊具を再現・展示し、あわせてイラストで遊びの情景をみせる。遊具を使って子どもの頃の遊びを実演し、来場者（子どもに大勢来てもらいたい）に楽しんでもらうことを狙いとする。これまでの公民館まつりのパネル展示とは異にして、来場者と共に「子どもの頃の遊び」を楽しもうという企画。「お話」は公民館まつり展示プレビューとした。公民館まつりの展示、実演の概要が説明された後、子どもの頃にした遊びについて会員同士話し合い、遊具の作り方などが話され、皆さん久しぶりに童心に戻ったようだ。展示準備担当者や開催当日の当番を決めた。

運営委員会 10 月 28 日(火) 8 名出席

平成 26 年 11 月例会 11 月 11 日(火) 10 時～12 時 18 名出席

司会進行 有田会長

議題 1 公民館まつり報告 — 遊びをテーマにし、実演もしたので来場者が多く賑やかだった。予想通り親子(3代)で来られる方が多く、子ども、孫たちに大人がむかしを思い出しながら一所懸命説明していた。「子どもの頃の遊び」をイラストでみせたのは効果大であり、遊具の実物もよく集めた、作ったと好評であった。プレイコーナーで子どもたちが実際に遊ぶには、場所取りに無理があった。

お話 — これまで鵠沼の地名について調べてきたチームから「地名聞き取り調

査」の中間報告があり(小林政夫会員)、新田義貞が湧き水を飲んだといわれる藤の森や鵜沼小学校校庭にあったといわれてきた真奈津留橋などについて話された。

運営委員会 11月25日(火) 6名出席

平成26年12月例会 12月9日(火) 10時~12時 19名出席

司会進行：中島会員

議題1 新年会について — 参加申込受付¥3,000(会計担当)

議題2 会誌110号の投稿依頼 — チームを作って作業に取り組むとの発言があったが、具体的なメンバーの話なし。

議題3 昭和初期の鵜沼の地図について — 山上会員から寄贈された昭和5年の鵜沼の地図：原寸(A2)コピー仕上げ 1部¥2,000で希望者を募る。

その他 30周年記念植樹の木製説明プレートの保護が必要(森岡会員) 現時点で保護加工すればOKではないか。他に公民館の記念植樹・楷ノ木について、公民館でのケアを進言できないか。

お話 — 鵜沼郷土資料展示室で「藤沢駅南口の開発の記録」を内藤会員の説明で見学した。

運営委員会 12月23日(火) 8名出席

平成27年1月例会および新年会

1月20日(火) アコレード 21名出席

司会進行 中島会員(例会・新年会共に)

例会 — 会誌110号の進捗状況について話があった。

新年会 — 会長あいさつ後、未年年男の長谷川祐会員の音頭により乾杯。会員の近況報告。恒例のビンゴゲームで盛り上がった。

運営委員会 1月27日(火) 8名出席

平成27年2月例会 2月10日(火) 10~12時 25名出席

司会進行 竹内会員

議題 1 会誌『鶴沼』110号の原稿の集まり具合について — 予定している原稿は概ね集まってきている。総ページ数は60頁弱。

その他 記念植樹の説明プレートの補修 — 森岡・守谷両会員により、きれいに仕上げられた。今号 *Coffee Break* を参照。

お話 — 「柳宗悦(やなぎむねよし)と民芸運動」をテーマに森岡会員が話した。日本を代表する思想家・柳宗悦は『白樺』の創刊に参加、また宗教哲学や西洋近代美術などに深い関心を持っていた。無名の職人が作る民衆の日常品の美に眼を開かされ、日本各地の手仕事を調査・蒐集する中で「民藝」の新語を作り、民芸運動を本格的に始動させていった。1936年、日本民藝館が開設されると初代館長に就任。以後72年の生涯を閉じるまで、ここを拠点に、数々の展覧会や各地への工芸調査や蒐集の旅、旺盛な執筆活動などを展開してきた。明年度の活動のひとつとして日本民藝館(東京・目黒区)を訪れることを視野に入れての「お話」だった。

運営委員会 2月24日(火) 7名出席

平成27年3月例会 3月10日(火) 10~12時 21名出席

司会進行 佐藤和子会員

議題 1 会誌『鶴沼』110号制作について — 掲載内容と印刷・製本日の案内。

議題 2 次年度の活動項目 — 4月例会で多くの人が提案するよう要望した。

お話 — 明治・大正における日本の代表的なアナキスト・大杉栄の『自叙伝』について、岡田会員が話した。大杉栄は1920年ごろ東屋に滞在して自叙伝を書いた、鶴沼にゆかりのある人物。同宿の久米正雄、宇野浩二らと交友したが、常に刑事の監視付きだった。詳しくは今号掲載の大杉栄の『自叙伝』参照。

運営委員会 3月31日(火) 8名出席

会員総数 56名(H27年3月末現在)

編集後記

- 今年は昨年のような大雪はなかったが寒い日が続いた。鶴沼から眺める真っ白な富士山は、右に丹沢、左に箱根の山々を従え実に凜としている。梅の香りが、春の訪れが近いことを告げている。会員から寄せられた原稿のレイアウトを終え、本仕立てにして校正作業にまわす。多くの会員の手を経て一冊の印刷物に仕上がるのは、桜の開花 — 春到来の頃だろう。(弥)
 - 鶴沼に残る通称地名や私地名で、すでに消えかかっているものを探し出し、地名に留めた人々の思いを記録として残し置きたいという思いを持った会員が、「地名おちぼ拾い」のグループを発足させて一年。地域の古老に訊ね、会員の方から情報を戴き、報告に記したような地名が判明し、その位置も確定したので地図上に記載することができた。明年度は、本村から引地地区の調査に力を注ぎたい。(M.K)
 - 大杉栄をめぐる女性とそのグループに属した女性たち、大正時代の“飛んでる女性”といってもいい人たちの行動を調べていて感じたのは、いかに彼女らが「自らに忠実に生きたか」ということである。因習や倫理に捕われず、心の赴くままに大胆に行動する。その奔放ぶりは爽快ですらあった。(T.O)
 - 昨年10月の公民館まつりは、「子どもの頃の遊び」をテーマに展示・実演した。これまでの展示とは大きく異なる内容で、出し物としては公民館まつりの狙いに即したものであったろう。むかしのことをキチンと伝えることは、当会の役割のひとつ。その一環として、今号に公民館まつりで展示した遊びのイラスト全てを掲載した。
 - ものごとを後世に伝える手段として、会誌発行の役割は大きい。今年は当会創立40年目。これまで会員が残してきた調査・研究、ものごとの考え方、出来事の記録などを改めて知る上で、会誌のバックナンバーは欠かせない。会誌を発行することは、かなりの労力と時間を要するが、その役割を考えると絶やすことなく発行し続けることが大切なことだと思った。(有田)
 - 恒例の新年会、向かいの席は福地美沙子さん。「オメデト。今日はキレイだね!」「今日は鏡をみたのヨ」。こんな会話を交わしてから10日余りして彼女は突如として逝ってしまった。あの日、定番のビンゴゲームで皆、子どもの気分に戻っていたが、なかなかビンゴにならない彼女もそれなりに楽しんでいた。葬儀の日、いろいろな人と話したが、三日後に控えた例会での「お話」の準備に追われ、彼女の思い出に留まっていられないことが辛かった。(K.M)
- * 「地名おちぼ拾い」で使用の地図：P6への地名記入は小林政夫会員、P7は有田会員による
「子どもの頃の遊び」のイラスト：森岡会員画、写真：竹内会員撮影

『鵜沼』 第 110 号
平成 27 年 3 月 31 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>